

0-2 歳児における絵本の読み聞かせ 方法の特質

—コミュニケーションに着目して—

砥上 あゆみ⁽¹⁾ 菅原 亜紀⁽²⁾

Characteristics of reading method of picture book stories for from 0 to 2 years old

— Focusing on communication —

by

Ayumi TOGAMI Aki SUGAHARA

1. 本研究の背景

2011 年より、0.1.2 歳児の子どもとその保護者を対象とし「子育てに絵本を」をテーマに絵本の選び方、読み聞かせの方法などについて出前講座^{注1)}を実施している。絵本への関心の高まりとともに絵本の読み聞かせを子育てに積極的にとり入れ、子どもとともに楽しい時間を共有している保護者がいる。他方、子どもが絵本に関心を示さないこと、読んでいても集中して聞いてくれないことに悩んでいる保護者もおり、読み聞かせそのものに疲弊している様子がみられる。このような不安感や負担感の要因のひとつとして、絵本の読み聞かせをすることで、“本が好きになってほしい”、“思考力を身に付けてほしい”といった知的な発達を読み聞かせの成果として期待していることが講座に参加している保護者の話から窺える。佐々木(2000年)¹⁾が、絵本の読み聞かせの効果として数値で計れるような種類の発達の効果を期待し、効率性を求めている保護者の姿を指摘しているように、講座に参加している保護者にも読み聞かせをすることで言語力、記憶力、理解力等の育成を期待していることがわかる。つまり、読み聞かせそのものよりもその先にある成果に視点が傾倒している

受理日 平成 29 年 11 月 30 日

(1) 純真短期大学こども学科 助教

(2) 純真短期大学こども学科 助教

こともある。親子の時間としての効果は無限²⁾にあり読み聞かせの質が大切となる。絵本を「大人と子どもが楽しむための媒体」として認識すべきであるが³⁾、保護者にとっては“今ここ”にある親子の交流の深まりは数値では計りづらく効果として捉えにくい一面があるのであると考えられる。

保護者が考える絵本の読み聞かせの目的は、言語の発達等の外生的意義と親子の交流等の内生的意義^{注2)}との2つがあり、その具体的な内容は非常に多岐にわたっている。“親子のふれあい”を目的と答える保護者の読み聞かせの様子をみると、子どもが関心を示さなくても言葉を教えるように何度も同じ言葉を繰り返したり、名称を質問したりする等といった知識の習得につなげるような読み聞かせ方法をとることがあり、内生的意義を目的としても結果的に外生的意義につなげるような読み聞かせをおこなっているということがある。そのため、子どもにとっては読み聞かせの時間が親子のふれあいとはならないこともある。このような現状を踏まえ、読み聞かせの方法によって子どもの読み聞かせの体験に質の違いが生まれると考え、昨年度は読み聞かせの目的や方法に着目した。その研究の成果として、0.1.2歳の絵本の読み聞かせは共感的、応答的な方法をとることが大切であることを示すことができ⁴⁾、その方法をとることによって家庭では絵本に興味を示さなかった子どもの反応が一変し、読み聞かせを繰り返し要求することがあった。前述している事例の子どもにとっての読み聞かせは、子どもが絵本を選択している（自己選択、自己決定）こと、子どものペースが保障されていること、発言を否定されないこと、親子の交流の深まりによって心が安らぐ等、その体験の質は高いものがある。

そこで、今年度の講座では、応答的、共感的な読み聞かせ方法の重要性を伝える内容を充実させていくこととした。受講後の感想^{注3)}の中には、心配していた子どもの行動を認める記述や“読み聞かせをしなければならぬ”と考えていた保護者は読み聞かせにおける不安感が軽減したという記述があり、絵本の読み聞かせの内容にとどまらず、子ども理解や子育てにも派生していくことを示唆する内容であった。

2. 本研究の課題と目的

絵本の読み聞かせには、①子どもの育ち、②親子の交流、③親自身のやすらぎ⁵⁾ということが期待されている。ところが、講座の中では“早く終わらせたい”、“寝る前に読むため、早く寝てほしい”というような声があがるように、保護者が“やすらぎ”を感じているような意見はほとんどない現状にある。保護者は絵本の読み聞かせに両義的な感情を抱いているものの、負担を感じている理由についてはこれまであまりふれられていない。そこで、なぜ、親が読み聞かせにおいて負担を感じているのかその要因を探り、読み聞かせそのものを検討することが1つ目の課題である。

また、絵本の読み聞かせにおいてはすでに絵本になんらかの興味を示している子どもを対象とした研究が多く、絵本に興味を示していない子どもを特記していることはない。しかし、保護者の相談には、絵本を最後まで聞かない、読み聞かせをしても絵本に興味を示さない等

があるように、すべての子どもが絵本に同じように興味を示すとは限らない。そこで、絵本の読み聞かせの方法論だけではなく、絵本に興味を示していない子どもと保護者との相互関係と、0.1.2 歳児に大切だと考える絵本を媒介としたコミュニケーションの獲得に着目し、その過程を明らかにしていくことが 2 つ目の課題である。

これまでの研究では、読み聞かせの有用性として言語の獲得や想像力等の外生的意義が育つこと、母子相互作用や子どもの安心感等の内生的意義^{6) 7)}が育まれていることが明らかにされている。また、0-6 歳児の保護者に読み聞かせの必要性や絵本の選び方等を 0-6 歳調査した研究⁸⁾、赤ちゃん絵本の読み聞かせ活動に着目した研究⁹⁾があるものの、0.1.2 歳児、3.4.5 歳児の絵本の読み聞かせの方法の特質や絵本を媒介としたコミュニケーションの根本を育む過程については言及されていない。フォーマットとルーティンの研究を検討した石川(2000 年)¹⁰⁾が示しているように、0.1.2 歳児の読み聞かせにおいて 0.1.2 歳児前半と 2 歳児以降の母親の語りかけがかわること、さらに、0.1.2 歳児前半の語りかけには順序性があることが明らかにされている。絵本の読み聞かせの語りかけが変わるということは、子どもの体験の質にも違いがうまれる。内生的意義を重視した読み聞かせが結果として外生的意義に結びついていくプロセス¹¹⁾が絵本の読み聞かせの一側面としてあり、0.1.2 歳児の読み聞かせ方法には特質があると考えられる。そこで、上述した 2 つの課題を探究することで、0.1.2 歳児の読み聞かせの特質があること、それが読み聞かせにおいて大切であるということを示すことを本研究の目的とする。

3. 研究方法と結果

(1) 読み聞かせにおいて保護者が負担を感じる要因について

講座に参加している保護者は読み聞かせに対する期待感だけではなく、負担や不安も感じている。本来、絵本の読み聞かせは、読み合い分かち合うといった言葉で表現されるように、絵本を媒介とした読み手と聞き手の相互関係のもとに成り立っているが負担感の要因を探究するため、敢えて、①保護者にとっての読み聞かせ、②子どもにとっての読み聞かせのそれぞれの視点から講座の参加者 66 名(累計)の感想^{注4)}を整理する。

① 保護者にとっての絵本の読み聞かせ

講座の参加者 66 名の感想を整理してみると、絵本を読み聞かせは、寝る前(34 名)、子どもが読んで欲しい時(25 名)がもっとも多い。寝る前には、習慣や儀式、子どもが寝ることがわかるようにといった記述もあり、昨年度の結果同様¹²⁾、子育てのツールとして活用されている。また、絵本の読み聞かせは、手が空いたとき(2 人)、余裕がある時(1 人)と答えた保護者もいる。また、読み聞かせについては保護者が、“読み聞かせの途中で同じ質問を何回もされる”、“同じページを何度も読まされる”ことにイライラするという内容もあげられていた。講座終了後の感想の中には、“子どものありのままを受け入れることが大切”といった子どもの行動を認める感想や“一方的ではなく対話をしながら一緒に楽しんで

読むことが大切”、新しい絵本を読ませたいと思っていたが同じ絵本でいいということ、子どものペースが大切（順番、ページどおりすすまなくてもいい）と読み聞かせの方法に関するものもあった。さらに、絵本を読まなければと思い不安になっている保護者の姿、絵本に興味を示さない子どもを心配する姿がみられるように、“絵本の読み聞かせしなくてはと思いこまずに”といった感想もあり、絵本の読み聞かせが根本的な捉え方として、“しなければいけないこと”となっている場合もあることがわかる。

②子どもにとっての絵本の読み聞かせ

読み聞かせは、子どもが抱っこをせがむ時、構ってほしそうな時にするという保護者の意見があるように、子どもが読み聞かせ以外にも親子の交流を求めていることがわかる。この講座では、絵本の読み聞かせをする時間をとることによって、子どもと保護者が絵本を読み合う場が確保される。読み聞かせを保護者の膝の上で聞いている姿、子どもが自分で選んだ絵本を保護者のもとにもっていく姿からは、子どもが安心して、楽しんでいる様子がうかがえる。他方、絵本の読み聞かせをしていても、興味のある場面のみに参加してくる子ども、動きながらも絵本を聞いている子ども等、様々な様子がみられる。このような子どもの様子を“座れない”、“集中できない”と捉え、保護者にとっては心配する要因となっている。

（2）絵本を媒介としたコミュニケーションの獲得過程

絵本に全く興味を示さない子ども（対象児：A児、2歳、男の子、ことばの発達に課題あり）とその保護者（以下、母親）を対象とする。その子どもに応答的、共感的な読み聞かせを実践し、その反応を記録に残していく。実践前には、以下の留意点を伝えている。

<留意点>

- ①子どもが興味を示したときに、読み聞かせをする。（子どもの自己選択、自己決定の保障）
- ②子どもが発言したことに、応答的な関わりをおこなう。
- ③子どもの選択（絵本を選ぶ、めくる、閉じる等）を大切にする。

また、母親は保育士資格保持者であり、現場での保育経験があるため、子どもの発達理解、関わり方について、共通理解をすることができている。さらに、実施の過程での報告、分析に際して実践者である母親との面談を行った。この実践をおこなうにあたっては、研究以外の目的で使用しないこと、個人が特定されないことを口頭で説明し、承諾を得ている。この実践の記録を基に、絵本を媒介としてどのようにコミュニケーションを獲得していくのかその過程を明示する。絵本に興味を示していない時期から、子どもが“もの”として絵本を認識し、絵本を遊びとして楽しみ、さらには、コミュニケーションを楽しむための絵本に変化していく過程を【表1】で示している。

【表 1】

	読み聞かせの様子
2月 (2歳4カ月)	<p>絵本の内容(絵、テキスト)に対する興味はない。物としてしか認識がない。</p> <p>ページをめくることはでき、めくることを繰り返している。めくる作業での遊び方である。</p> <p>絵本をパラパラとめくり、置く。積む。</p> <p>母親が絵本に描かれているものを「〇〇だね。」と言葉にしても反応はない。</p>
3月 (2歳5カ月)	<p>絵本をめくっている時に、母親が横から内容を読み聞かせると少し興味をもつようになる。</p> <p>本棚には、何冊も絵本を並べているが、「いないいないばあ」と「がたんごとん」のみを手に取り、見ている。</p> <p>他の絵本には手をつけることはなく、2冊のみを取ってめくり、自分で絵本をめくり、「ばあ」などと母親が読み聞かせた言葉を真似て声を出している。</p>
4月 (2歳6カ月)	<p>「おひさまあはは」「これはまる」「だるまさんが」も見ようになる。はじめは、母親がこれなら気に入るのではないかと絵本棚の中から選び、読み聞かせたこと。</p> <p>はじめは興味を示さなかったが、気にすることなく横で楽しそうに読んでいると少し興味を示す。何度か数日かけて繰り返していると、ラインナップに加わった。</p> <p>読み聞かせると喜んで見る。最後まで読み終えることは少なく、好きにページをめくっては、終わる。それに合わせて母親が言葉を発するという読み聞かせ。</p> <p>読んでと持ってくることはなく、見てと持ってくる。母親にめくってみせて満足している。</p> <p>1人で絵本をめくって楽しむ様子もみられる。</p>
6月 (2歳8カ月)	<p>読んでほしいと絵本を持ってくるようになる。</p> <p>「あい、あい」と絵本を母親に渡し、読んでとアピールしている。</p> <p>何度も読んでいたので内容を覚えており、次のページへの期待もあるようで、待っている。</p> <p>母親と同じように声を出して喜んでいる。</p>

<p>7月 (2歳9カ月)</p>	<p>どんな絵本でも見るようになる。病院や書店で絵本があると手に取るようになる。 その中でも知っている絵本があると真っ先に選ぶ。 絵本の絵を指さし、母親が違うことを言ったり、思っているような反応ではなかったりすると不満を示すようになる。 食べ物が出てくると「アムアムアム・・・」と食べる真似をする。(表象の世界)</p>
<p>9月 (2歳11か月)</p>	<p>「たべたのだあれ」で意図がわかるようになり、答えを分かって指さしができるようになる。言葉に興味を持ち始め、絵本を次々持ってきては、指をさし、名称を言ってもらって満足する。家にある絵本のほとんどの名称を言ってもらうまで続く。 絵本の中の絵を見て、怖いものであれば体をすぼめたり、かわいいものであればほっぺに手をあてて微笑んだりとユーモアを表現する姿もある。</p>

3.考察

(1) 絵本の読み聞かせについて

1つ目の課題である読み聞かせにおける保護者の負担感の要因と絵本の読み聞かせそのものを検討する。読み聞かせをする時として「手が空いたとき」、「余裕がある時」とあるように、読み聞かせは何かをしながらできるものではなく、保護者も読み聞かせに集中する場が求められる。それは、近年、“読み合う”と表現されるように、知識の習得の場としてではなく、まずは親子のふれあい、交流の時間として確保されなければいけない。子どもにとっての読み聞かせは絵本を媒介として保護者との交流ができることであり、それによって落ち着き、安心、安らぐことができる。読み聞かせの体験は長期的な記憶¹³⁾に残っていることもあり、子どもにとって安心、安定を育む機会となっている。負担感の要因は、読み聞かせのその先の成果を求めていることもひとつである。その先の成果に視点を向けた保護者と、子どもにとっては親子のふれあい、交流の場となっている場合、そこに、互いに求めていることのギャップがあるとも考えられる。

絵本そのもの特徴としては共同注意が成立しやすく、テキストを保護者が解釈し読むといった独特のコミュニケーション¹⁴⁾が生じる。つまり、子どもの月齢、年齢に合わせた絵本を選択すること、同じ絵本でも読み手がどのように読むかということも重要な事柄となる。絵本の読み聞かせが子どもの成長発達に有用であることは言を俟たないが、語彙がふえるに違いないと生真面目に教科書のように¹⁵⁾読み聞かせをするのではなく、どのように絵本の読み聞かせをするのか、その方法論が重要となってくる。絵本の読み聞かせの量より質¹⁶⁾

であり、0-5歳児の読み聞かせをひとくくりで考えるのではなく、0.1.2歳児、3.4.5歳児の読み聞かせの目的と方法には違いがあり、それを明確に示していく必要がある。

(2) 絵本を媒介としたコミュニケーションについて

【表1】で示した過程に名称をつけ、解説と考察を行う。

<物体としての絵本>対象児：2歳4ヶ月

母親の呼びかけに反応を示さないことが多く、指さしにも反応がなく、指さしは見られなかった。言葉については、単語にはならず喃語であった。この時期の絵本の読み聞かせは、母親が読み聞かせようとしても一切興味を示さなかった。絵本のページをめくることはあるが、ただ黙々とめくる作業を繰り返しており、絵本も日用品や積み木と区別はなく、置いたり、積んだりする“物”であった。ページをめくる際にも、内容や絵を確かめる様子はなく、次々とページをめくる作業のみを行い、持続時間は数秒で次の行動へ移っていた。この時期、母親は子どもが積む、置くという動作を一緒に行うなど、読み聞かせではないが共感的な関わりを繰り返していく。赤ちゃんにとって、絵本が日常生活の中の“物”から道具として認識する過程には大人の存在が必要となる¹⁷⁾が、絵本に興味がない“物”としての認識のころから、大人の共感的な関わりが大切となっている。

<遊具としての絵本期>対象児：2歳5ヶ月

母親の呼びかけや語りかけに反応を示すようになっていた。この頃から母親の絵本の読み聞かせにも耳を傾けるようになる。環境として、10冊ほどの絵本を常に並べていたが、対象児が興味を示したのは、「いないいないばあ」と「がたんごとん」であった。対象児が絵本をめくっている時に母親が内容を声に出してみると、この2冊だけ反応がよく、その後も自分で手に取るようになった。手に取った絵本を床に置き、めくっては、「ばあ」「あたおと、あたおと…」と母親が読み聞かせた言葉を真似ていた。発する言葉が場面に合っているわけではなく、「いないいないばあ」では「ばあ」、「がたんごとん」では「あたおと、あたおと…」と声をだし、絵本と絵本の中の単語が音として結びついている様子だった。ここで注目したいのは、子どもが主導になり、母親はそれを支えるようなサポートをとっていることである。つまり、子どものペースが保障されている。母親が子どもの行動に合わせて絵本の内容を語りかけることで、子どもの関心と内容がリンクし、子どもにとって心地よい時間となったのであろう。これにより、他の物と物体としての区別がなかった絵本が、遊具として認識されたと考える。

<共有のための絵本>対象児：2歳6ヶ月

母親が指さした方向を見る志向の指さしができるようになった。絵本は好きな様子で、他の玩具で遊びながらも合間に絵本を手に取るようになる。知っている言葉も増え始め、母親

が言っていることへの反応がみられるようになる。この時期に、「おひさまあはは」「これはまる」「だるまさんが」も見られるようになった。対象児は、絵本を母親の元へ持ってきて前に置き、母親の顔を見るようになる。この時点では、絵本を指さしすることはなく、母親の顔を見て、母親の反応を待っていた。そこで、母親が絵の名称などを答えると、満足している様子だった。母親と絵本を共有し、自分が見ている絵本を母親にも見てほしいという気持ちを感じられる。絵本を媒介とした母親との交流の楽しさを知ったことで絵本の選択も広がっている。子どもがめくったページを母親が読むといった方法により、ここでも子どものペースが保障されている。

<やりとりを楽しむ絵本>対象児：2歳8ヶ月

母親の言葉に首を振って「YES」「NO」を答えるようになった。非言語コミュニケーションの獲得である。さらに、自分が見つけたものを指さしして母親に教えるようになった。このころには、絵本を母親の前に置くのではなく、手渡すようになる。子どもの“見て”と床に置いていたところから、“読んで”と手渡す動作は、まさに、共有物として、交流を深めていくことがわかる。母親が読み聞かせると語尾だけだが、同じように声を出して喜ぶ姿もみられる。言語、非言語コミュニケーションをとる楽しさを十分に体験し、子どもの行動が変容している。

2歳9か月時には、単語が数個出るようになった。このころには、どの絵本も手に取り読み聞かせをせがむようになる。読み聞かせに次への期待もみられるようになった。つまり、予測する力が身についている。母親の顔と絵本を交互に見ながら反応を楽しんでいる様子からは、母親の表情から感情を読みとることができるようになってきている。コミュニケーションの発達は著しい。

<ことばの芽生えとコミュニケーションを楽しむための絵本>対象児：2歳11か月

日常の出来事であれば、こちらの話していることをおおまか分かるようになった。わかるという理解面。物の名前にも興味があり、様々な名称を母親に確認するようになる。ことばの発達の「命名期」の表出である。「たべたのだあれ」は、以前から読み聞かせをしていたが、この時期から絵本の意図を理解して答えられるようになった。以前は、絵本の中の知っているものを指さしているだけだったが、母親の問いかけに少し考えて「これ！」と答えを指さすようになる。同じ絵本でも、子どもの発達とともに読み聞かせの質が変化していく様子が明らかであった。

絵本を媒介としたコミュニケーションの獲得過程は、“物としての絵本”という認識から“遊具”へと移行していく。遊具として認識されることで、初めて“絵本としての楽しさ”を知る。この時には聞いた言葉を発する等の変化がみられ、絵本を媒介とした音声でのコミュニケーションが表出している。絵本が“共有物”となると、子どもは絵本を媒介として母

親とのコミュニケーションを視線、表情でとるようになり、指さしも表出する。子どもにとっての絵本の認識の変化と共に絵本に興味を示さなかった子どもが2冊の絵本から、その選択の広がりが見られることも特記すべき事項である。絵本が“やりとりを楽しむ”ものとなると、相互関係の基に読み聞かせがおこなわれ、非言語コミュニケーションの獲得、活用もみられる。また、同じ絵本を繰り返し読むことで予測する力も身につけていることは、これまでの読み聞かせの成果でもある。また、指さし・表象・模倣の表出、感情理解、感情を身体で表現、ことばの内容を理解する等、言語・言語表現の獲得、コミュニケーションの獲得過程のなかで重要な発達がみられたことも注目すべき事柄である。

4. 本研究の成果と課題

本研究の目的は、0.1.2歳児の絵本の読み聞かせ方法には特質があり、その方法が大切であることを示すために、2つの課題を探究した。その結果、読み聞かせにおける親子間の求めているもののギャップを見出すことができた。絵本の読み聞かせの有効性のみが自明のごとく語られ、2歳の子どもの9割が絵本の読み聞かせを体験しているように絵本への関心が高まっている。しかし、その方法論が明確にされないままとなっていることが、保護者の負担感の要因にもなっている。そのため、読み聞かせの方法を示すことによって子どもにとっての読み聞かせの体験の質が高まり、保護者の負担感の軽減にもつながるといえる。

2つ目の課題とした、絵本に興味を示さない子どもに共感的、応答的な読み聞かせ方法を実践し、絵本を媒介としたコミュニケーションの獲得過程を示すことができたことが本研究の成果である。0.1.2歳児における共感的、応答的な読み聞かせ方法によって、絵本に興味を示さない子どもが絵本に興味を示すだけにとどまらなかった。絵本を“もの”として認識している段階から、遊具として、共有物として、そして読み合う絵本として認識していく過程を示すことができた。さらには、絵本を媒介としたコミュニケーションの獲得過程では、言語の獲得にかかる、表象、指さし、模倣、発語、非言語コミュニケーションの獲得等、非常に多岐にわたるものが表出していくこともわかった。このプロセスは、絵本に興味を示さない子どもだけではなく、言葉の獲得やコミュニケーションが気になる子どもへも参考になる事例である。また、絵本を媒介とした相互関係のなかで、共感的、応答的な方法によって、言語表現・言語の獲得の基礎、コミュニケーションの根本を育む機会となるだけでなく、子どもの自発性に伴う活動が活発に展開され、子どもの成長において欠かすことができない体験となっている。子どもの成長を支えた母親に共通していることは、子どものペースを保障する、子どもの言動に応答する等、0.1.2歳児の絵本の読み聞かせの中核である。絵本は子育て家庭にとって身近な児童文化財であるため、継続的な実践が可能であることも特記すべき事項である。

以上のように、0.1.2歳児の読み聞かせ方法には特質がある。0.1.2歳児の読み聞かせ体験を土台として、絵本の読み聞かせに期待される想像力、言語力を育む3.4.5歳児の読み聞かせへとつながっていく。つまり、その土台をどう育てるのが重要となってくる。本研究で

示した言語の獲得の基礎となる 0.1.2 歳児の読み聞かせは、絵本を媒介とした相互の関係性が大切である。今後は、その相互関係性に重点をおき、さらに読み聞かせ方法の内実を探究していくことが課題となる。

【注】

注 1) 出前講座とは、大学のもつ専門的な知識を地域の方々の役立てるということを目的に福岡市南区が企画している南区出前講座（大学版）の中の一つである。本講座は、「絵本とともにのんびり子育て」という題目で、対象は 0 歳~2 歳のお子さんとその保護者である。受講料は無料。20 人前後の団体もしくはグループで申し込みを行うため、講座受講希望者と対象としている。開催場所は、主に公民館や福祉センターなどである。

注 2) 秋田・無藤を参照し、読み聞かせをとおして生じる親子のふれあいや子どもの安らぎ・安心感などを内生的意義とし、文字を覚えるなどの知識や言語の獲得などを外生的意義とする。

注 3) 注 4) 講座の最後にアンケートに協力していただく。その際、記入していただいた内容は研究で使用すること、個人が特定されないことを書面で示し、口頭でも説明をしている。

【引用文献】

- 1) 佐々木宏子（2006 年）『絵本は赤ちゃんから 母子の読み合いがひらく世界』新曜社
- 2) 前掲 1)
- 3) 仲本美央（2004）「現在の赤ちゃん絵本と周辺研究の動向」『育英短期大学研究紀要』第 21 号 pp.33-44
- 4) 砥上あゆみ、菅原亜紀「言語表現の基礎を培う 0-2 歳児の絵本の読み聞かせ講座における親子への支援をとおして-」純真紀要 第 57 巻 2017 年 pp.84-86
- 5) 前掲 pp.77-78
- 6) 秋田喜代美・無藤隆（1999）「幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討」『教育心理学研究』44（1） pp.109-120
- 7) 加藤美帆（2016 年）「読み聞かせ場面における母子間の関係性について質的研究」『花崗大学心理カウンセリングセンター研究紀要』第 10 号 pp.53-66
- 8) 後藤ヨシ子、前田敦子（2004）「絵本と親子交流に関する研究」『長崎大学教育学部家政教育』No.43 pp.75-83
- 9) 前掲 3)
- 10) 石川由美子、前川久男（2000）「絵本を媒介とした母親と子どもの読み活動に関する研究の動向」『心身障害学研究』24 pp.227-240
- 11) 前掲 4) pp.85

- 12) 前掲 4) pp.82
- 13) 前掲 7) pp.83
- 14) 今井靖親、廖小慧、中村年江 (1993) 「日本と台湾における絵本の望ましい読み聞かせ方法に関する比較」『奈良教育大学紀要』第 42 巻 第 1 号 pp.211-223
- 15) 佐々木宏子「絵本を乳幼児と楽しむ (2) 「絵本と子どもの発達を考える尺度について」
<http://wwwd.pikara.ne.jp/sasakih/tomoni2.html> 平成 29 年 11 月 30 日
- 16) 前掲 6)
- 17) 前掲 3) pp.34-35

【参考文献】

- 1) 石川由美子、前川久男 (1996) 「絵本理解とその発達順序性—発達援助としての絵本利用の基礎研究」『心身障害学研究』20 pp.83-91
- 2) 佐々木宏子「絵本を乳幼児と楽しむ (1) 「乳幼児が絵本を楽しむようになる道筋は一人ひとり異なる」
<http://wwwd.pikara.ne.jp/sasakih/tomoni1.html> 平成 29 年 11 月 30 日